

P4C 研究会 2017・2・19

日時：2017年2月19日 午後5時半より

場所：大阪大学中之島センター605

参加者：小学校教員4名、中学校教員4名、大学教員2名、社会人2名

○ 自己紹介

① 2月16,17日にお茶の水女子大附属小学校で実施された「第79回教育実際研究会 学びをひらく ―ともに“てつがくする”子どもと教師―」の報告。

- ・ 先ず、参加者数の多さとその規模の大きさに正直圧倒されてしまったということ。
- ・ 全学年全クラスで「てつがく」の授業が実施されていること。
- ・ 参加人数が非常の多かったのは道徳の教科化が契機になっているのではないかという印象。

② 哲学対話の授業分析の試みの紹介

③ p4cで博士論文を書いているNの授業記録に関する議論

題材：YouTube Dr.J はかく語りき「ハワイでは誰もがマイノリティ」のビデオ
(<https://youtu.be/IJDCe77a7do>)

：上記ビデオを見て、行われた生徒の対話のビデオ (<https://youtu.be/fspXJ5pBfpY>)
およびその記録

(<http://p4c-japan.com/wp/wp-content/uploads/2016/05/3KP-Thomas-Jackson.pdf>)

N：授業でp4cを実施しているときによく言われる質問。授業でp4cをするときに、例えば、自殺や宗教的な教義等、問うことのできないもの、言うことのできないものがあるのではないか。Th. Jackson（以下TJと表記）はIntellectual Safety（以下ISと表記）が確保されたコミュニティではそのようなことも話すことができると言っている。ただし、参加者全員に対するrespectがある場合に限るのであり、そういう関係が築かれていれば、今のような問題はクリアできるのではないか。このような問題を考察していて、思い出したのが、TJのビデオを見た後に行った、神戸プロジェクト（以下KJと表記）の授業での対話であった。KJの一環として私のグループに所属することになった18名の生徒の対話である。この授業では、TJが相手の目を見ることが大事であると言っているので、生徒がペアになって1分間お互いの目を見つめるようにさせた。この授業について皆さんで自由に議論して欲しい。

先ず、TJ のビデオを見る。次いで、授業の途中を見る。

N : 授業のこの部分を選んだのは、子どもが何でも安心して話している様子を見ることができると考えたから。ここで発言する 4 名の生徒は、たまにしか発言しないが、今回は議論が三分の一経過して、議論が落ち着いてきたときに話し始めている。そしてすごい発言をしているという印象を持った。

・P と R はそれまでの議論の流れにそのまま乗らないで、批判的な発言をしている。どう感じる生徒か。

N : 二人は似ていると言えば似ている面がある。

・45 分という時間が長く感じられなかった。面白かったのは、最初は女子が発言していなかったが、ボールを回すと女子が発言するようになった。TJ のビデオを見て、感じ方が変わった。学習支援の子を相手にしていて、マジョリティとマイノリティの意味が違う。TJ の発言が今は当たり前を感じる。以前見たときはきれいごとだという感じであったが、子どもたちと接していくうちに変化していった。

・ものすごく当たり前なのに、なぜ感動するのか。TJ のビデオを見ると、彼は聞かれた後に話している。当たり前のことを話してはいるのだが、それを聞かれてから話している。彼は本当にそう思っているという印象がある。

・彼とは会ったことがある。実際に自分のクラスで授業もしてもらった。言葉ではなくて、出会ったことによる信頼というものがある。家庭科の先生がビデオを見て涙を流していたと言うが、何か体験している先生だから、瞳の奥に見える、子どもの生活史の中で見て来たものが、分る。言葉ではなくて、体験ではないか。哲学対話をしているという感じがしない。この違いは何だろう。IS の中にあるのは言葉だけではない、何か。TJ は瞳と言っているが。

・N さんや今の発言は重く感じる。家庭科の先生がいつ泣いたのかが気になる。

・「あなただってマジョリティではないか」ということを、先ほどの話を聞いて考え直した。

・O 君のところで、問いの秩序が変わる。抽象的思考へと話が展開していくと思ったが、IS の流れが見て取れる。

N : P は哲学的な話をしている。子どもの定義をし直そうとしている。自分が授業した場合、ここで議論を深めようと思うが、IS の展開になっている。

- ・ TJ のビデオにしろ、この授業のビデオにしろ、テンションが高い、楽しい。笑いがある。アメリカではこのようなことに道徳的価値を置いているのではないか。日本とは違うと思う。

- ・ すごいなと思った。なぜか。もう一回考えると、p4c の中で子どもを考えている。子どもっぽさについて話しているのだけれど、対話の感じてきているのは、子どもの姿を語っている。p4c を通して、子どもを考え直している。

- ・ ビデオを初めてみたが、面白かった。TJ はコミュニケーション力が高いのかなと思った。この人自身、あまり論理的に話していないという印象。語られてから話している。実際の授業はどうなんでしょう。

N : TJ は、今はあまり自分ではやっていないようです。授業には「やー」と言って入ってきて一緒にやっている。TJ が話すときはすごく面白い。例えば、好きなものは昼寝だというようなことを子どもに語りかけている。

- ・ 私のクラスでやってくれたとき、皆で手をつなぐと電気が流れてひよこがピョコピョコ出てくる。・・・見て接する。自然とこういうオーラが出ていて、子どもはそれを感じている。教師はそれに対してプレッシャーを感じる。TJ を見たとき、自分はまがい物だと感じた。

- ・ こんなに授業がうまいのには感激した。自分の道のりが見えた。

- ・ K の発言にはなるほどなと思った。権力性に基づく Safety があるのではないか。

- ・ 確かにそれはある。それなりに子どもの評価は出る。しかし、そのような状況では、多様性は生まれない。

- ・ 教師として立つことで、権力をもって立つ。p4c の C を教育現場でということだが、Safety の背景には権力性があるのでは？

- ・ TJ はどんな人でも好きになる。彼は、自分が教員として聞こえる以上の声を聴いて

いる。彼を嫌いになる人はいない。

・権力の話だが、**Safety** は自己言及的なこと。皆安心してねということに自分も入っている。権力性が崩れたりするのが面白い。

・教師ではないのですが、子どもと接していて、先生は子どもに守られていると感じる。**Safety** のことがあって、**Safety** の担い手に関しては子どもの役割が大きい。子どもは先生をよく観察している。

・**Safety** が守れたら、放っておいても大丈夫と言っていた。図工の研修の中で、テキストを振り返って、今の子どもに何が求められているかということが問題になり、「絵を描こう」というあり方が求められているとなったが、それは権力的な印象であった。作品至上主義という体制。それを壊していかなければいけないと思う。図工でも作品至上主義とならないためには、**Safety** でなければならない。自分を表現し、描くということも **Safety** がなければ、子どもは作品を描くことはできない。

・手本があってということですか。

・モデルを見て、それと同じように描こうねということ。作者自身はどんな思いで描いたか分からない。後の人の見解を押し付けているなどと思う。

・**Intellectual** ということは大切。なぜ知的なのか。デューイは知性を大事にしている。いろいろ対立があったとき、それをどうするかというあり方が **Intellectual** ということ。絵も同じ。活動全般。

・**Safety** の話が出たときに、**IS** が出たときに、**TJ** は **Safety** を作ろうとしていたのかなーと思う。「～は大事だよ」こういった発言が **Safety** を作ろうとすること。その場で作ろうとしている。ビデオの中では、インタビューアとの **Safety** を作ろうとしている。生徒にもそれが伝わる。**Safety** が映像で作られていくのが見て取れる。

・生徒の反論している様子がすごい。**TJ** がすごいということを先生が言うと、皆そう思って話しているのに、反論している。間接的に **N** (先生) に反論しているのかなって思った。

・**TJ** に対する感動、皆はそれを知らないんだ、それが美しいんだと彼は言う。心と体の研究会をやって、**TJ** のこの発言に救われたなどと思った。同時に、沈黙の後、こんな

話を知っているかい、こんな歌を知っているかいと問いかけてくる。こういう Skill を身に付けようという気持ちもわいてきて、欲がわいてきている。まぶしい、くやしいという気持ちもある。

・IS の I が大切だということが印象的でした。Safety はできたが、それだけになっていたように思います。Intellectual がないのか、Intellectual の高いものを求めているのかという感じです。

・IS。知的に話をする態度。作っていく感じ。探求ということが伴う。探求を忘れてはいけない。そういう態度が大切。共感ベースでやっているのが TJ。哲学的対話の中身が安心して経過していく。仮面という言葉。人々は仮面をかぶっている。TJ も仮面じゃないのか。人はそこまでなれるのだろうか。仮面を取っ払ってというところまでいけるのか。自分て何だろう。

・TJ がすごい、彼の授業は感動的である、彼を嫌いになる人はいないということだが、それは確かにそうかもしれない。しかし、普通の教師がそれを真似るわけにはいかないし、先生が「TJ はすごい」と言ってしまえば、それはやはり一種の道徳的発言であり、教師の価値観を押し付けることになるのではないか。それに対して、子どもの発言が新しい展開を生んだり、相手の意見の想定している点を指摘して反論したりする場合、そのような発言を素晴らしいとか、おっ、そうかとか言って評価するのは、「TJ はすごい、素晴らしい」というのとは違っている。あるいは、せめて、「TJ は素晴らしい」と言った場合、先の発言にもあったように、その Skill を取り上げて、議論に関しては、彼の発言にはこういう Skill があるから、素晴らしい、しかも、そのスキルは彼の人格と一つになって、単なるスキル以上になっている、つまり、我々が Skill に依存して、型にはまってしまうということとは全く違う、というくらいの説明があってもいいのでは。

研究会の後、いつもの通り、飲み会。参加者 8 名。TJ は素晴らしい、感動的、という発言の問題性が話題になる。